



Sweet Assort 無配book

2013.2.11

あまい誘惑 おまけ



イギリスは本当に趣味が悪いと思う。

いや、趣味というよりも感性がおかしいのか。

「ずげー甘い美味そうない」

こたつに入ってDVDを眺める日本の背後に陣取り、高い鼻梁を髪に埋めたイギリスは、蜂蜜シロップのように甘ったるく滑らかな声で囁きかける。唇を耳に押し当てるように流し込まれる声は、実に居心地悪く尻がもぞもぞしてしまふ。

美味そうないと言われても、使っているのはドラッグストアの特売品、シャンプルー&リンスお徳用セット五百ml七九八円底値です。ねありがとうございました！ 新品である。

それこそ良い香りだと彼が持ち歩いてきたシャンプルーのラベルをこっそりゲータグ先生で調べて、二百mlで三〇ポンド、日本円で四千五百円……王室御用達怖い！ と遠い目になった日本には、彼の台詞は厭みにしか聞こえない。

「はあ……ありがとうございます。特に拘りのない安いシャンプルーなんです、ご不快でなければ幸いです」

「安物って……少しは拘れよ。変なもの使ったら髪が傷むだろ。それに金を使わないでデフレがどうのって言えるかよ」

ええ、ええ、知ってますよ、イギリスさんは自分の香水に合わせた拘りの特別調合ですよ。皇室御用達なんて制度、うちは廃止さ

れましたし、一億総中流という国民意識が強いこちとらペンハリガンなんて普段使いできないです、はい。

——とスルメのように乾いた声でそう返したいが、もちろんそんなことは言えるはずがない。

馬鹿にしたような言葉と裏腹に、声色はあくまでも明るく、今にも鼻歌が聞こえてきそうなイギリスなのだ。下手にそんなことを返すと——

「まあ、あれだ。お前にやった香水に合わせて一式贈ってやってもいいぞ」

「あ、いえ、それは……」

「か、勘違いするなよ！ 別にお前んとこのシャンプルーがどうこうとかじゃなくて、本来なら揃えるべきものを失念して香水だけなんて片手落ちだからな」

言わなくてもウキウキと出された提案に、内心溜息を吐く。

昨日、イギリスが山のように持ってきた『誕生日プレゼント』とやらに、自分をイメージして調合させたという香水があったのだ。

もじもじと顔をトマトのように赤く染めて曰く、彼の香りと融けるとより一層馨しくなるという代物とのことで、まあ確かにムスクが利きすぎない上品な香りはイギリスの早朝の深い森を思わせるそれと違和なく混じり、心地よい深呼吸に微笑んだのを覚えているのだ。

「なんだよ、もしかしてあの香り、気に入らなかつたか？」

どうしたものかと黙り込んだ日本に、イギリスは狼狽えた声を出した。

昨日も笑顔で受け取って、今だって付けてるでしょうに。

内心呆れながら、巻き付く腕が緩んだのをいいことに、拘束からするりと抜け出し、振り向きイギリスを見詰めた日本は、「あ、見るんじやなかった」と目を逸らした。

キラキラと冬の陽射しを浴びて光り輝く黄金に、透けるような白哲の頬は男らしい鋭利さと優雅さを象っている。不安そうに揺らめく翠はけれども宝石より輝いていて――

こんな言葉も詰まるような綺麗な顔が至近距離にあると、ほんの一瞬前まで考えてたことすら蒸発してしまうではないか。ああもう爆発してしまえ、この無駄イケメン！

「な、なんとか言えよ……」

オロオロした声なんか出しやがって、卑怯なんですよ、あなたは！  
ここで私が八つ橋破って本音さらけ出したら、傷ついた顔してほろほろ泣いちゃうんでしようが、この豆腐メンタルめ！その癖甘い顔したら成層圏突き抜ける勢いで凶に乗るし、なんだってこんなに振れ幅広すぎるんですか！いつそあの時、抱いてやればよかったですかね、そしたら腕の中で大人しく可愛くにゃんにゃん鳴く子猫ちゃんに――

なるわけない……とこの二ヶ月弱で改めてイギリスの肉食獣っぷりを否応なしに体感させられた日本は心の中でぐりと膝をついてよろめいた。

いやまあ、あの晩「私があなただを抱く立場でいいなら、付き合うのも吝かではございませんか？」と言った時に、半ば本気だったのだ。とはいえ、それはイギリスが受けるはずはないと踏んでの言葉

であって、G&Hのスーツを惜しげもなく雪の舞う往来で土下座して、「それでもいいから」とぼろぼろ泣きながら訴えられた日には、その時点でかなり腰が引けていた。

確かに記憶の中のイギリスの躰は、男の己の眼からしても惚れ惚れするほど美しく、綺麗に鍛えた筋肉も青年らしい瑞々しい肌も、昔イギリスがなんだかよく分からない言いがかりをつけて自分を抱いた時からきつと変わってないように見え、思い出せば挙動不審になるくらいいそそられるし正直欲情もする。

それに綺麗な顔が快楽に融けて気持ちよさそうに喘ぐのを見たいとか、自分の手で気持ち良くさせたいとかそういう欲がないかと言われれば「ありますけどね」と答えるしかないけれど、「けどね」というのがポイントなのである。

『私だって日本男子、漢ですから！』と死地の赴く悲愴な覚悟で、云十年ぶりに肌を晒し合い、イギリスを押し倒した時、「おれ、初めてだから優しくしてくれよ」「ぜ、善処します」「それっていいえってことかよ？あ、それから本当に初めてだから慣れるために最低一時間以上前戯でたつぷり馴らして、躰が忘れないうちに一週間欠かさず毎日抱いてくれよ？」と今からにゃんにゃん啼かされる子猫とは思えぬ凶々しさでそう宣われた時に、日本の心は折れた。

ああ、そうだとも。

「抱きたい」と思ったことがないといえは嘘になるが、こちらら枯れに枯れまくり、最早二次元で十分満足できます面倒は嫌いですな二千五百才。

欲は面倒という二文字の前に霧散する。

絶句した日本に「だっておれだって最初の時、そうやって抱いてやっただろう？」とするりと浴衣に手を忍ばせて、「嫌なら代わりにおれが全部やってやる」と押し倒したイギリスに内心安堵し、くると体勢を入れ替えられて口を塞ぐキスに大人しく舌を絡めた時点で決着はついたのだった。

いい加減この生殺しの進展のない関係に終止符を打って、嫌われて避けられてせいせいしたいという後ろ向きな気持ちから隙をみせた自分と、これをチャンスと一気に攻勢にかかった彼では、その意気込みで勝敗が決まったのは当然。

にやんにやん啼かされるはずの子猫は獷猛な肉食獣にクラスチェンジして、話が違ふという悲鳴は喘ぎに代わり、にやんにやんどころか思い出したくもない赤裸々な喘ぎを上げさせられ続けたのは自分の方だった。睨んでも罵っても、脂下がった笑みで「約束だから」と囁いた彼はきつちり一週間、文字通り日本の上に居座って、それからは毎日鳴る電話とネットの音声チャットが喧しい。

そのくせ、どれだけ水に向けても絶対に「愛してる」という言葉は言わないし、けれどもその程度の存在ですか私は、とやさぐれるには、イギリスの言動は重すぎるのだった。

黙って翠の瞳を見詰める。

おろおろ見下ろすイギリスの顔は不安で一杯と描かれていて、内心溜息を吐く。

やはり初手を間違えただろうか。

あの時へたれずにマウンティングで自分が上位だと躰に教え込み、鉛と鞭できつちり躰ければ、この感情が不安定な彼も陽だまり

で微睡む猫のように穏やかに幸せそうな顔で、促すまま素直に愛の言葉を語るようになったかもしれない。

——しかしなあ……

と心の片隅で黒い悪魔がよきつと顔を出した。

そう簡単に幸せを満喫されたら、百年以上も片思いをし続けた自分の立つ瀬がない。

今も昔も自分のことを好きなくせに、言葉に出来ないへたれなのだ。せめて一言だけでも素直に言ってくれるまで、せいぜいあたふたしてもらいましょうとも。

「香りは嫌いじゃないですけど……」

「けど？」

期待と不安でおろおろとする彼に、思わせぶりに目を伏せる。

「なんだかマーケティングされているみたいで、気が進みません」

そう溜め息を吐いてみせると、「マーケティング?!」「え、あ、嫌なのか?」と赤くなつて青くなつて餌を待ち構える鯉のようにイギリスは口をばくばくさせて慌てふためく。

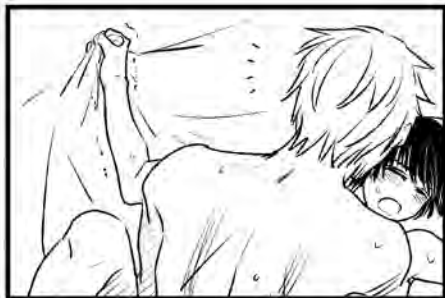
それに感情が乱高下するイギリスは、これはこれで可愛いから、もうちょっとぐらぐらしていればいい。

そんな意地の悪いことを思う自分に「いや、マーケティングだなんてそんなことべ、別に思つてなんかないんだからな」と必死になつて弁解する彼はやはり趣味が悪いのだろう。

そして素知らぬ顔の意地悪でイギリスを涙目にした挙げ句、宥めるために抱きしめ、必死に抱き縋られて嬉しい自分はもつと趣味が悪い、と日本は自嘲したのだった。



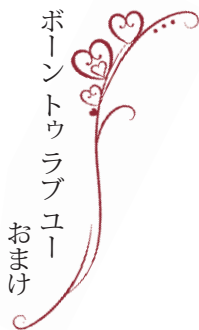




2013.2.09 やま(お) (お)

## アイブズボーン トウラブユー

おまけ



からだもころも、とろ火でゆつくりと煮詰められているようだった。

つまさきまで絡んだ下肢、繋がっている腰の奥、背にびったりと合わさった胸板、肩口に乗せられた顎と、触られる部分ですべて触れているふたつの軀は、体温まで馴染みきって、自分の輪郭がぼやける。

絶頂を目指そうとしない穏やかな交接と、じゃれ合うような愛撫は、あたたかな海に身を任せているのに似ていた。分け合う愉楽は衝迫を伴わず、幾度かゆつくりと大波に引き掠られて、シーツの海に溺れてつかのまの死をふたりで迎え、またゆらゆらと快感の波間を揺蕩う。汗にすべる互いの膚や、微熱を帯びたような軀をずつと感じていると、時間の間隔も現実感もとろとろと融けた。

汗で湿った日本の髪を指に絡めたり、くちびるで食んだり、背後のイギリスはしばらく好きに遊んでいる。日本は腰に巻きつけられて余ったほうの彼の腕から、その手を胸元まで引き寄せて、神経質な細い指についた意外に丈夫そうなつめを弄ったり、てのひらに無意味な線を指先で描いてみたりと、やはり手慰みのような真似をしていた。刺激らしい刺激を与えられているわけでもないのに、滲み出すように泪はずつと筋を引いていることを、日本は己

の軀ながら不思議に思っている。

しばらくイギリスの息遣いだけを聞いていた耳が、異なる音を拾った。猫の音が、日本はそのままのたたと口に出した。そうだなとイギリスが相槌を打った。彼の口調もぼんやりしている。

「あ……、飯の催促か」

戯れをやめないまま、イギリスが思い出したように言葉を続けた。

「……そういや、腹減ったような気がする」

「私は喉が渴きました」

朝食時にイギリスが淹れてくれた二杯ぶんの紅茶が、日本が今朝から摂った水分のすべてである。それももう汗と汗とさまざまな体液として体外に出てしまったせいで、声がかすれた。

「風呂に入ればお茶の時間だな……。おまえ、やつぱりオペラは観たいのか」

イギリスの体内時計はティータムが基準なのだろうか、日本は少しおかし。口に出しては、問いに応えた。

「観たいです」

本当は、どうしても観劇に行きたいというわけではない。ただ、鑑賞するだけが目的ならば悲劇が好きなのイギリスが——このひとの自虐趣味はそういう部分にも表れている気がする——、自分のために恐らくはあちこちの劇場のプログラムから選んでくれたのだから、日本はそれが惜しいのだった。

「仕方ねえなあ……」

気合いを入れて起き出すようにちいさく息を吐いたイギリスが、絡んでいた脚をほどく。それをさびしいと感じた時、抜くぞと声が



かけられた。まるで存在するのが当たり前のようになっていた腰の奥の大きな熱が、ずるずると退いていく。すっかり癒着したようになつたイギリスのからだの一部を、日本の裡は引き留めたがつて蠢いた。

「……あ、ああ、……ン、……ツ」

「かわいい声出すな、ばか。またしたくなるだろ」

ぐちゅ、と聞き難い音を立ててすべて抜けてしまうと、栓を失つて緩んだ口からぬめる液体があふれ出す。あらたに下肢が汚れてゆく感覚に、日本は軀をふるわせた。

繋がりが解かれて、体温が離れる。急に寒くなつた気がして身を縮めると、横向きになつた顔に影が射した。熱の名残に上気した頬とうるんだ翠の腫が近付いて、くちびるが涙に濡れた目許を押し拭う。彼も体内の水分が不足しはじめたのか、くちびるはすこしかさついていた。

「あー、離れんのやだ……」

火照つた頬を寄せて寝起きのようなくぐぐだとした口調で呟いてから、溜息を吐いたイギリスがのそりと身を起こした。引き留めたいのに、日本の軀は神経とうまく合致せずに動かない。

シートにくるまれて抱き起こされ、膝の下にイギリスの腕を感じると、不意に軀が浮いた。ようやく日本は口を動かした。

「え、あの、何を」

「風呂」

「いや、自分で歩けますから」

楽な体勢と激しさを欠いた交わりは、日本の軀を痛めつけること

がなかった。深い部分にどろりと疲労が溜まっているのを感じるだけだ。

「誕生日なんだから、サーヴィスされてろ」

「……せめて、何か身に付けてくれませんか」

「いいだろ、うちのなかなんだから。ストリーキングしようってわけじゃねえんだし」

「居たたまれないんです」

「おまへ、あれだけやっておいて、変なところで変なこと気にするよな」

口論というよりは言葉遊びのようなやり取りを交わして、結局イギリスが妥協した。面倒くさそうに日本の寝間着をバスローブ代わりのように引っかけると、もう一度日本を抱き上げる。浴室まで連れて行くというほうは譲る気がないらしい。

日本はやっぱ居たたまれなかつたが、イギリスの体温が戻つてきたのは快くて、彼の薄らと朱い首筋に額を擦り寄せた。くすぐつたかつたのか、イギリスが喉の奥で笑つた。

ふたりの姿を認めた二匹の猫は浴室までくつついてきて、閉口したイギリスが餌を与えに行つた。バスに溜まってゆく湯の蒸気が漂うなかで、日本は浴室の扉をちらと見遣つてからシャワーを出した。頭から湯を浴びながらおそるおそる背後に手を回し、まだイギリスが息づいているような感覚の残るその箇所を指で開いた。どうっ

と粘った体液が流れ出すのを感じて、頬が焦げつく。

回転が極度に鈍っている頭でも、さすがに情事のあとでイギリスと一緒に湯をつかう危険性には思い当たった。せめて当たり障りないところまでと、自分の裡に指を沈ませて彼が出したものを掻き出す。指が不自由なく動いてしまう軀が、少しおそろしい。

イギリスの長い指を思い描いてしまいうそのなを必死で追い遣りながら始末をしていたところへ、不意に背中に風が当たった。

「日本、水……」

振り返った日本は、眼を丸くしたイギリスと、彼が手にしたミネラルウォーターのボトルとを、茫然と見た。やはり思考が鈍っている、鍵をかけたのだ。

「……良い眺めだな……」

「出て行って、ださいよおおお！」

まあまあ、と日本の絶叫をいなして、案の定イギリスは羽織っていた寝間着を脱ぎ捨てると、浴室へ足を踏み入れてきた。日本が焦って指を抜き、イギリスに向き直ると、腕を伸ばしたイギリスがシャワーを止め、ボトルを差し出してくる。

「呑めよ。そのまま風呂入ったら、脱水で倒れるぞ」

もつとからかわれるかと思いきや、至極まっとうなことを彼は口にした。やや気拔けた日本は、ボトルをおとなしく受け取った。つめたい水は舌から喉から軀に沁みて、食道を快く落ちてゆく。

「……ありがとうございます」

人心地ついで礼を云うと、うんと頷いたイギリスが水のボトルを掠ってゆく。イギリスはそれを床に転がして、腕を伸ばしてくる。

抱き寄せられた耳許に、くちびるが触れた。

「で、おまえは何をしてんだ」

「なっ、何をつて、」

忘れていた羞恥がこみあげてきた日本は、腰を這わせられた指が、その奥を割るのに、軀をびくつかせた。

「おれが綺麗にしてやりたい。変なことしねえからさ、……いい？」

予想外に情欲の匂わない声音が、かえって日本をすくませた。応えを待たずに、イギリスの手は優しく口を抜けて、内部に堅い指を含ませる。大抵こういうときの彼のくちびるは、意地の悪さを發揮するというのは、時折日本のこめかみに触れるだけのキスを落とすほかには動かされずに、黙って汚れを掻き出してゆく。

たまらなくなつたのは日本のほうだった。腫れぼたたいような熱をもったままの裡に、余計な刺激を与えないようにする指の動きは、焦らされているとしか感じられない。軀の芯に残った燄火を掻き起こされて、声を抑えようとしても、鼻から抜ける呼吸が甘くなる。てゆくの止められない。

「ん、……こんなもんな」

温いシャワーの水流と指とで日本のなかを洗い終えて、イギリスがつぶやいた。己の軀の状態がわかっている日本は、彼の肩に押しつけていた顔が上げられない。

「触ってもいいか」

軀の狭間に差し入れられたイギリスの手のひらが、脚の付け根を撫でた。触る、というのが、その場所をさしているのではないことは言外に伝わってくる。肩口で日本が頷くと、イギリスが微笑う気配

がした。やはり擲擧や嗜虐の雰囲気がなく、優しい気配だった。物ちあがった欲望に指を絡められて、日本はちいさく喘いだ。イギリスの肩に顔を擦りつける。穏やかな手つきは気持ちいいのに、充たされない。

「……イギリスさん、」

「痛いかな？」

さっきいっぱい触ったしなど、責める手を甘くされて、違うと日本は首を横にした。

「う、うしろも、っ……」

元々緩かったたがは容易に外れて、日本は求める言葉を吐いた。一瞬硬直したイギリスが、腰を支えていた手を下へとずらした。くばみに触れた指が、探るような緩慢さでふたび裡に入ってくる。なかの肉が悦んで蠢き、それでも足りない細い指を食い締めた。

「……ふ、あ、イギリスさ、……っ」

「もう一本、指、欲しい？」

指では足りないと訴えるために、とうとう日本は顔をあげて、イギリスを仰いだ。斜め上に、彼のむずかしい貌と、動い光の揺らめく瞳を認めて、日本は思い切った。背に縋っていた手をそろそろと動かして前に回し、彼が知らぬふりで怒張させていた肉を握る。途端、イギリスの腰がふるえて、凜々しい眉根が寄せられた。

「……これ、」

ちよつと鋭くした視線を寄越したイギリスが、苦い貌をした。

「……おれは、我慢したんだからな」

後ろから指が抜かれると同時に、軀を反転させられる。シャワー

で暖まった壁にもたれた日本は、腰を挿んだイギリスがもう一度ゆつくりと押し入ってくる感覚に涙を零した。体内のうつろが埋められると飢餓感が薄れて、神経が充たされる。

イギリスの顔が見たくなって首をねじ向ける。眼が合った彼は、甘苦いような笑みを浮かべた。

「気持ち良さそうな顔しちゃって」

「いいです、……すぐぐく、……」

「……おれも、最高」

はあ、とイギリスが溜息を吐いた。またなかに出しちまったら終わらねえぞ今日、とぼやくように云うのがかわいくて、日本は少し笑った。

結局、日本が達しても、イギリスは中で出そうとはしなかった。口でしてほしいと請うた彼は、やはりいつもとは異なった。喉の奥まで無理矢理突いたりはずせず、硬くなった先端で舌の上や上顎をこぞげるように優しくつつき、彼でいっぱいになった口腔を確かめるように頬を撫でて、甘やかに眼を眇める。ぜんぶのんで、とねだる声有幸せそうで、日本の胸をあたためた。

——このままお湯に沈んでしまいたい。

花びらなんぞを浮かせた淡いピンク色をした湯の表面を鬱々と眺め、日本はうなだれた。やたら少女趣味の入浴を演出した張本人は背後でおんぶおぼけのようになっていた。日本が吐いた溜息を聞き

つけると、濡れたうなじにくちびるを落として寄越した。

「そんなに恥ずかしがるなっつて」

イギリスの声は上機嫌だが、浮薄さはない。それがまた、日本に身の置き所をなくさせる。あのあと、ぼんやりしているうちに髪の毛から足のつまさきまでイギリスに洗われて、気がつけば猫足の浴槽のなかだった。あたたかい湯に身を浸しているあいだにだんだん我を取り戻した日本は、結果として、身を揉むような羞恥に襲われている。

「……変なことしないで、云ったじゃないですか」

「しなかったら、おまえだつて困つたらろ」

日本のやつあたりを、イギリスは押搦するでもなく平然と返した。これがいつもならば、日本の醜態を嬉しそうにねちねちと云つて寄越すところなのに——房事のこととなると、どうしてこのひとは常のかわいげをどこかにやっってしまうのだろう——、いまのイギリスは風ぎの海のようにだ。

「……明日さ」

「はい？」

「グリニッジに行こうぜ」

全然違うことを云つたイギリスに、日本ははてと首を傾げた。明日は美術館に行くと思っていたが、歴史に残る天文台はどうに移転して、いまはあのあたりには何があるのだったか。確か海事博物館に、カティ・サーク号に……

「ブラネタリウムがあるんだ」

星が見たいと、イギリスが言葉を継いだ。

「偽物だけど、おれんちもおまえんちも、今じゃ田舎まで出かけなけりゃ本物の星なんか見られねえしな。うちは曇りが多いし」

ああ、とようやく腑に落ちた。自分が戯れに紛らわせた本心は、諦念も希望もひつくるめて、このひとはちゃんと受け止めてくれたのだ。それを彼は彼自身のなかでどう消化したのか、こんなに落着いた優しきを見せている。

「いいですね。……季節も同じですから、あの夜のような冬の星空が見られるといいんですけど」

「おれは、四十億年後の星空が見たい」

プログラムを調べないと何をやってるかはおれから聞えけどと、すぐに続けたイギリスの、それが応えなのだろうと日本は思った。

「今年はいいい誕生日でした。……朝から疲れましたけど」

「まだ終わつてねえし、疲れたのはおれだけのせいじゃねえぞ」

オペラ観ながら寝るなよと、笑い含みに云うイギリスの声音は、やはりどこまでも優しかった。



Sweet Assort おまけ無配本  
2013.2.11. 二人でお茶を2

かいた人 ましろあや・ゆあ・ゴツイセン  
offbook15@gmail.com